



高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。  
“黄金の郷”“いわて平泉を支える、魅力溢れる”こしえるびと“のメッセージをシリーズで紹介していく。

## 新たな仲間のために力になりたい

大東町大原  
南野 晋 さん

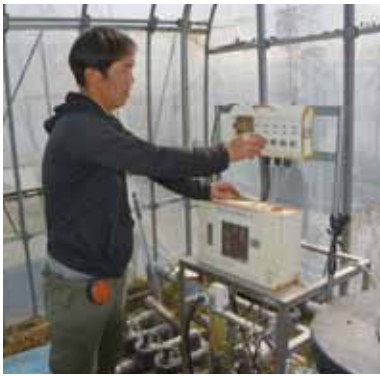
### 就農を決意

今年のトマト収穫も終盤となった10月中旬。南野晋さんは心地よい日差しの中、ハウスの中で管理作業を進める。

2002年、長男出生をきっかけに就農を決意した晋さん。妻が釜石市出身だったことから岩手県内で就農先を探した。すぐにでも経営を開始し収入を得たかったことと、大東町(当時)の就農支援事業の内容が合致したことから、同町への移住と就農を決意。農地に摺沢のトマト団地を希望したところ、作付け予定者から農地を借りることができたので、04年2月に大東町に転居。自分が







かんすいき 灌水機の調整を行う南野さん

作付けしようとした農地を譲ってくれた小野寺悦朗さん（同町渋民）の元でトマト団地に入り、ハウス建設の手伝いから農業者としての第一歩を踏み出した。引越し先の大原では周囲に誘われ早速「水かけ祭り」に参加。すんなり地域に溶け込んでいった。

### 恵まれた環境のもとで

春になりハウス建設が終わると、悦朗さんの作業を手伝いながら技術を吸収する毎日が始まった。「悦朗さんがやって作業を自分が追いかけて

作業していた」と懐かしむ。生産に関する知識が何もなく、何が不安かさえ分からなかったという当時。「トマト農家はみんなこうしているんだ」と、悦朗さんを真似て圃場準備や定植作業を進めた。就農初年度は6坪に作付け。ホルモン処理などの専門的な技術も学び、実が付くまでの流れを習得した。「悦朗さんや団地の仲間が気にかけて見に来てくれたことが心強かった」と当時を振り返る。

### 仲間

トマト部会の中には、若手生産者で組織する「担い手班」がある。晋さんも当然のように誘われ加入した。「当時、団地以外にトマト生産者の知り合いが少なかった」が、担い手班に参加したことによりトマト仲間の人脈

が広がった。「交流を深めるごとに欲が出るというか：周りを見るともっとやらなくてはという気持ちになる」。生産意欲が高まるのに合わせ、作付け面積を増やしてきた。

ここ数年は新規就農を志す研修生を受け入れるなど、すっかり先輩の立場になった。「技術的な指導はできていないが、他の研修先も経験し自分に合った方法を見いだしてほしい」と期待を込める。始めた頃の自分の姿を思い出しながら、新たな仲間づくりへの取り組みにも力を入れる。

—— 農業をするには自分のビジョンも大切だが、柔軟な姿勢も必要。天候など条件が変わるのは当たり前。その対応を探りながら晋さんの収量増大へのチャレンジは続いていく。

## PROFILE

南野 晋さん (52)

Susumu Minamino

大東町大原

1965年石川県生まれ。高校を卒業後、東京の音楽関連専門学校で音楽プロデュースなどを学ぶ。卒業後、東京のホテル勤務を経て、2004年に一関市大東町で就農、トマト生産を開始。現在は42坪を作付け。妻、長男と3人暮らし。



私の一品

### Bluetoothスピーカー

作業をしながら音楽を聞いている。以前はイヤホンを使用していたが、周りの音が聞こえなくなるためスピーカーに切り替えた。クマよけにもなっているとか。